

「吉野川学習交流WS」にみる河川を利用した総合的な学習における 関係者等の役割についての一考察*

A study about the role of the persons in "The Periods for Integrated Study" which used the river
at the case of "The Yoshino River study exchange Work-Shop"

花岡 史恵**、澤田 俊明***、上月 康則****、山中 英生*****、湯佐 昭二*****

By Fumie HANAOKA Toshiaki SAWADA Yasunori KOZUKI Hideo YAMANAKA Syouzi YUSA

1. はじめに

平成 14 年度からの「総合的な学習」の時間の導入に伴い、一層、学校教育と身近な地域社会や環境との関わりが重要視されて来ており、教育分野と教育分野を取り巻く種々の専門分野の連携が不可欠になってきた。本研究では、吉野川をフィールドにした「川に学ぶ社会」実現にむけての情報交流・人的交流の場として企画開催された一連の学習交流ワークショップに焦点をあて、これらの一連の学習交流ワークショップを通して、今後の河川利用における河川関係者および大学関係者を含む専門家等の役割についての一考察を行うものである。

2. 学習交流ワークショップ

(1) 背景と目的

本研究における一連の学習交流ワークショップの企画にあたり、大学関係者・河川関係者・教育関係者・専門家等から構成される 10 名規模の「環境と川と教育を考える研究会」(以下、研究会と略記)が平成 12 年 10 月に組織された。研究会では、学習交流ワークショップの開催目的として、今後の吉野川流域での教育分野と河川分野の新たな関係づくりの基礎となること、吉野川を題材にした総合的な学習の計画・実施・人材育成等に資すること、吉野川における総合的な学習の場に供する河川整備や管理等の計画・実施・人材育成等に資すること、が位置づけられた。

(2) 学習交流ワークショップの活動の経過

学習交流ワークショップは、「環境と川と教育を考える研究会」の主催により、平成 12 年 2 月から平成 13 年 8 月に 4 回の「研究会」、平成 14 年 1 月に徳島県下小中学校「アンケート調査」、平成 14 年 2 月～3 月に小中学校「ヒアリング調査」、平成 14 年 3 月 23 日、24 日に「吉野川をフィールドにした総合的な学習交流会」が企画開催された。表 1 に、「環境と川と教育を考える研究会」による吉野川をフィールドにした活動経過を示す。表 2 に、研究会会員の構成比と、研究会および学習交流会の参加者合計の構成比を示す。

3. 第 1 回～第 4 回研究会

研究会活動は、平成 12 年 2 月から平成 13 年 8 月に 4 回の研究会が企画開催された。第 1 回～第 3 回の研究会では、身近な川・吉野川・吉野川上板河川敷を検討フィールドとしてワークショップ方式により開催された。第 4 回では、吉野川・泉谷川を検討フィールドとしてワークショップ方式により開催された。検討内容を表 3 に示す。

(1) 第 1 回研究会

第 1 回研究会における「身近な川グループ」の意見の特徴は、子供たちが遊びながら川の現状調査を行い、川の歴史や背景等を探る活動が教育的利用としてあげており、安全面に対する知識や情報を入手することを課題としてあげている。「吉野川グループ」の意見の特徴は、自分たちの生活と結びついた生活排水やゴミなどと川との関係を調べることを教育的利用としてあげており、子供たちが川に興味を持ち川へ近づけるための安全対策を課題としてあげている。「上板河川敷グループ」の意見の特徴は、管理の必要な堤防と河川敷の違いを知り、河川敷に生息する生物を遊びながら学習することを教育的利用としてあげている。各グル

*キーワード：学習交流ワークショップ、河川利用、総合的な学習

**正員、環境とまちづくり(徳島県勝浦郡上勝町大字福原字川北 30 番地、TEL 08854-4-6290、FAX 08854-4-6291)

***正員、工博、日本建設コンサルタント徳島営業所(徳島市吉野本町 1-14、TEL 088-655-3248、FAX 088-655-4763)

****正員、工博、徳島大学大学院工学研究科(徳島市南常三島町 2-1、TEL088-656-7335、FAX088-656-7335)

*****正員、工博、徳島大学工学部建設工学科(徳島市南常三島町 2-1、TEL088-656-7350、FAX088-656-7341)

*****国土交通省徳島工事事務所(徳島市上吉野町 3-35、TEL088-654-2211)

表- 1 学習交流ワークショップの活動と経過

年月日	活動名	活動概要	参加者等
H.12 10.13(金)	「環境と川と教育を考える研究会」準備会	【テーマ】吉野川上板河川敷きの「利用・整備」について教育関係者との連携について検討	大学関係者2名、河川関係者1名、その他1名、計4名
H.12 10.23(月)	「環境と川と教育を考える研究会」発足会	【テーマ】吉野川上板河川敷きの「利用・整備」について教育関係者との連携について検討／準備会での検討事項を徳島県教委を交えて検討「研究会」の発足について検討	教育関係者1名、大学関係者2名、河川関係者2名、その他1名、計6名
H.12 12.21(木)	【名称】第1回研究会 【場所】上板町教育委員会	【テーマ】河川の教育的利用の可能性と課題、【検討フィールド】上板町内の身近な川・吉野川・上板河川敷、【内容】ワークショップ方式により議論	教育関係者12名、大学関係者5名、河川関係者3名、その他2名、計22名
H.13 2.2(金)	【名称】第2回研究会 【場所】上板町教育委員会	【テーマ】川を教材にした総合的な学習の計画案づくり(その1)、【検討フィールド】上板町内の身近な川・吉野川・上板河川敷、【内容】「気づき」「調査」「発表」「話し合い」「提案」「行動」のうち、「気づき」「調査」に関する計画案づくりのアイデア抽出	教育関係者11名、大学関係者6名、河川関係者5名、その他2名、計24名
H.13 2.27(火)	【名称】第3回研究会 【場所】上板町教育委員会	【テーマ】川を教材にした総合的な学習の計画案づくり(その2)、【検討フィールド】上板町内の身近な川・吉野川・上板河川敷、【内容】	教育関係者10名、大学関係者2名、河川関係者5名、その他3名、計20名
H.13 8.16(火)	【名称】第4回研究会	【テーマ】上板河川敷の整備イメージについて、【検討フィールド】上板町内の身近な川・吉野川・上板河川敷、【内容】現地視察を行い、河川敷の空間整備のあり方・必要な施設・整備における参加の可能性等についての意見交換を行った	教育関係者11名、大学関係者5名、河川関係者6名、その他3名、計25名
H.14 3.16(土)	【名称】水環境学会発表会 【場所】岡山大学	【テーマ】吉野川における学習交流会の取り組みについて、【内容】これまでの第1回～第4回研究会の活動、および今後の活動について、A-3版16枚のパネル展示	
H.14 1.10～ 1.31	【名称】徳島県下小中学校アンケート調査	【対象】徳島県全県下の小中学校328校対象、257校の回答(回答率78%)、【アンケート項目】河川を利用した総合的な学習について設問	257校の回答
H.14. 2月～ 3月	【名称】小中学校ヒアリング調査	【対象】アンケート調査より、河川を利用した総合的な学習が実施されている主な小中学校のうちの小学校9校、中学校3校の計12校をヒアリング	12校実施
H.14 3.23(土)	【名称】吉野川学習交流会(1日目)	【テーマ】河川と総合的な学習、【主要プログラム】小中学校アンケート結果報告、総合的な学習の事例報告、話題提供「川をフィールドにした総合的な学習の視点と課題」、ワークショップによる意見交換、情報交換会	教育関係者12名、大学関係者5名、河川関係者5名、その他17名、計39名
H.14 3.24(土)	【名称】吉野川学習交流会(2日目)	【テーマ】河川学習におけるリスクマネジメント、【主要プログラム】話題提供「河川学習におけるリスクマネジメント」「判例から見る安全対策」、ワークショップによる検討	教育関係者2名、大学関係者5名、河川関係者6名、その他12名、計25名

表- 2 研究会会員および参加者合計の構成比

分野	会員構成比	参加者合計構成比
大学関係者	47%(7名)	19%(32名)
河川関係者	20%(3名)	20%(33名)
教育関係者	13%(2名)	36%(59名)
専門家等	20%(3名)	25%(41名)

表- 3 研究会での検討内容

研究会	主要検討内容
第1回研究会 H.12.12.21(木)	・河川の教育的利用の可能性と課題
第2回研究会 H.13.2.2(金)	・河川をフィールドにした総合的な学習プランづくりにおける「気づき」「調査」について、のアイデア抽出
第3回研究会 H.13.2.27(火)	・河川をフィールドにした総合的な学習のプランづくりのアイデア抽出
第4回研究会 H.13.8.16(火)	→視察 ・徳島県上板町内の河川及び吉野川の上板河川敷の見学 →検討 ・河川敷きの空間整備のあり方 ・河川敷きに必要施設 ・河川整備における学校関係者の参加の可能性、 ・吉野川上板河川敷きの施設について ・吉野川上板河川敷きでの教育について

ープの共通意見としては「楽しみながら学習できること」を河川の教育的利用としてあげており、「安全面への情報収集や対策」を課題としていることが伺える。

(2) 第2回研究会

第2回研究会における「身近な川グループ」の意見の特徴は、身近な川がどこから流れてくるのか、水があるときとないときがあるのはなぜか、といった川の現状に「気づきのアイデア」をあげ、環境問題・防災・景観・地域と川の関係などの調査を「調査のアイデア」としてあげている。「吉野川グループ」の意見の特徴は、吉野川全域の環境・生物・形状等に「気づきのアイデア」をあげ、情報収集・行動・活動等の調査を「調査のアイデア」としてあげている。「上板河川敷グループ」の意見の特徴は、大声を出して走ることや川で遊ぶことで川の様子や周辺の生物への関心を持つことに「気づきのアイデア」をあげ、地域の環境・地域の人々を知るための調査を「調査のアイデア」としてあげている。各グループの共通意見としては、「現地を体験して気づきを発見すること」を「気づきのアイデア」としてあげており、「現地調査・環境調査・地域との関わり」を「調査のアイデア」としていることが伺える。

(3) 第3回研究会

第3回研究会における「身近な川グループ」の意見の特徴は、子供たちの気づいたものを抽出することを第1とし、河川の利用・環境・生物等についてみんなで話し合い、専門家や地域の人または他地域の人等との交流を通じたプランづくりをあげている。「吉野川グループ」の意見の特徴は、吉野川の素晴らしさを体験や遊びによって知り、吉野川に詳しい人の人材バンクの作成やインターネット等により情報を入手するとともに人との交流を図るプランづくりをあげている。

「上板河川敷グループ」の意見の特徴は、テーマに沿ってインターネットや図書館で調査を行うとともに地域の人との交流により、関心のあることについての継続した調査を行うプランづくりをあげている。各グループの共通意見としては、専門家や地域の人等の協力と交流による、川と自分たちの生活に関連したプランづくりの必要性が伺える。

(4) 第4回研究会

第4回研究会における「泉谷グループ」の意見の特徴は、利用する子供たちの意見を取り入れ、整備するところと整備しないところを明確にした河川敷の空間整備をあげ、河川敷の施設整備としては、スポット的な観察ポイントや簡素な休憩施設による整備をあげている。整備における参加の可能性としては、計画のスタート段階から地域の人や河川管理者、専門家等の参加の必要性をあげている。「吉野川グループ」の意見の特徴は、安全な空間としてできるだけ自然のままの河川敷空間整備をあげ、河川敷の施設整備としては、日陰のある簡素なベンチやアプローチのための歩道整備程度をあげている。整備における参加の可能性としては、子供たちが参加できるゴミ拾いや草むしり等をあげている。各グループの共通意見として、河川敷の空間整備としては、自然的な空間整備をあげ、河川敷の施設整備としては、簡素な施設整備をあげ、整備における参加の可能性としては、計画段階から各種活動まで、子供たちや地域の人々の参加の必要性が伺える。

4. 小中学校アンケートおよびヒアリング調査

「吉野川学習交流会」に先駆け、平成14年1月に実施した徳島県下の小中学校を対象としたアンケート調査の概要と調査項目を表4に示す。また総合的な学

習に河川を利用している主な小中学校について行った個別のヒアリング調査の調査項目を表5に示す。

表-4 アンケート調査の概要と調査項目

アンケート調査実施	平成14年1月10日～1月31日
アンケート調査対象	徳島県下全小中学校328校
アンケート調査回答数	257校(回答率78%)
アンケート調査項目	28項目(以下に示す)
問1. 学校名 問2. 総合学習の担当 問3. 担当教科 問4. 川を題材にした総合学習の有無 問5. 主として利用している川 問6. 現地での主な使用場所 問7. 使用している川への訪問頻度 問8. 総合的な学習のテーマ 問9. 資料収集の場 問10. 総合学習のための資料収集 問11. 学校以外の協力者の有無 問12. 協力者の種類 問13. 学校以外の必要な協力者 問14. 必要な資料 問15. 集めにくい資料 問16. 総合学習のための他の学校との交流 問17. 総合学習のための他の学校との交流の場 問18. 川を題材とした総合学習に関する学校間交流の場 問19. 学校間交流への期待 問20. 河川管理者との交流の場の必要性 問21. 河川管理者との交流への期待 問22. 川の危険と思われる場所 問23. 川の使用における必要な安全対策 問24. 安全対策に関する管理 問25. 総合学習を進める上での苦労点 問26. 総合学習を進める上での難しい点 問27. 川を題材とした総合学習に関する自由意見 問28. 吉野川をフィールドにした総合的な学習交流会への参加	

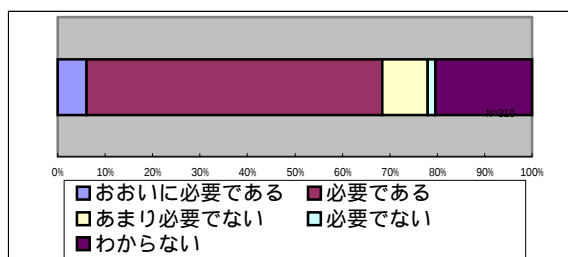
表-5 ヒアリング調査項目

・主に利用している川の場所 ・川を題材にした総合的な学習の対象学年 ・川を題材にした総合的な学習の内容 ・学習の成果のまとめ方 ・学習による子供たちの変化 ・総合的な学習の学習指導計画書 ・河川関係者や地域住民との関わりについて ・学習交流会への参加 ・学習交流会での発表の可否

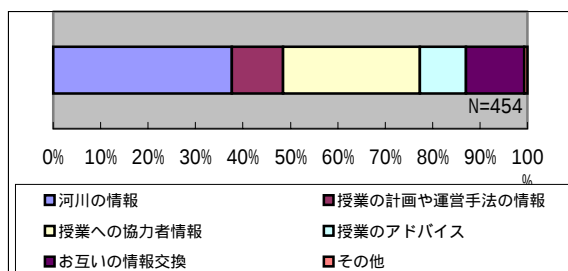
(1) アンケート調査

アンケート調査では、問4において、回答者の40%が総合的な学習に河川を利用しており、その内、問10の総合的な学習のための資料収集において、やや不足している・不足していると答えた人が62%となっている。また、問18の川を題材にした総合的な学習に関する学校間交流の場を必要と答えた人が75%、問20の河川管理者との交流の場を必要と答えた人が69%を占めている。その中でも、問19の学校間交流の期待としては、「授業の計画や運営手法の情報」が35%を占め、問21の河川管理者との交流への期待としては、「河川情報の提供」が38%、「授業への協力者情報」が30%を占めている。また、問25の総合的な学習を進める上における苦労点として、「授業の計画段階と答えた人」が43%を占めている。これらを総合的に判断すると、川を題材にした総合的な学習では、授業の

計画段階において、学校間交流や河川管理者との交流により、総合的な学習における河川および河川を取り巻く各種情報の収集や協力依頼等の連携の必要性が伺える。



問 20. 河川管理者との交流の場の必要性



問 21. 河川管理者との交流への期待

(2) ヒアリング調査

ヒアリング調査では、河川を利用した総合的な学習が実施されている小中学校 12 校を訪問し、学習内容・学習成果のまとめ・学習による子供たちの変化・河川関係者や地域住民との関わり等についての意見を収集した。学習内容では、子供たちの自主性による「気づき」を重視し、学習成果のまとめ方についても子供たちの考える力を伸ばすための指導を心がけていることが伺えた。また、総合的な学習による子供たちの変化では、川とのふれあいにより、ふるさと意識の向上と、川や川を取り巻く自然を大切に思う気持ちや、川を汚さない習慣が、育まれているという意見が大半を占めていた。河川関係者や地域住民との関わり等については、ゲストティーチャーとして、子供たちや学校教育に関わりを持ってほしいという意見が大半を占めており、総合的な学習における河川関係者や地域住民等への参加ニーズの高さが伺える。

5. 吉野川学習交流会

平成 14 年 3 月に 2 日間にわたり、表 6 に示すプログラムで「吉野川学習交流会」が開催された。吉野川学習交流会では、教育関係者・河川関係者・大学関係者・専門家等の参加により、河川を利用した総合的な学習

を実施している小学校の先生方による体験報告を踏まえ、川を利用した総合的な学習の視点や課題についての意見交換を行った。また、河川関係者における河川情報の紹介や専門家等による全国における環境教育等の取り組み情報の紹介により、意見交換を行い、教育関係者と河川関係者等の交流を深める機会となった。今後は、アンケート調査やヒアリング調査においても要望のあった、総合的な学習の計画段階における情報が収集および交換できる場として役立つ学習交流会の企画開催が望まれる。

表- 6 吉野川学習交流会のプログラム

1 日目： 平成 14 年 3 月 23 日 (土)	学習交流会—1 河川と総合的な学習 ：13:00 開 会 / 13:10 総合的な学習空間としての河川(徳島全 県下の小中学校アンケート結果報告) / 13:30 川 をフィールドにした総合的な学習の事例 / 15:00 学習交流会—1(川と教育)・テーマ：川をフィー ルドにした総合的な学習の視点と課題、・話題提供 及び学習交流会(ワークショップ方式) / 17:30 閉 会 情報交流会 河川と教育の情報交流 ：19:00 情報交流会(総合的な学習に関する河川情報、他)
2 日目： 平成 14 年 3 月 24 日 (日)	学習交流会—2 リスクマネジメント(無料) 09:30 楽しみながら体験教育ゲーム 10:15 学習交流会 - 2 (リスクマネジメント) ・テーマ：河川学習におけるリスクマネジメント ・話題提供及び学習交流会(ワークショップ方式) 12:30 閉会

6. おわりに

本研究では、研究会・アンケート調査・ヒアリング調査・学習交流会による一連の学習交流ワークショップの企画開催を通して総合的な考察をおこなったことにより、教育関係者と河川関係者等との連携の必要性が再確認された。今後の各関係者の連携においては、教育関係者の必要とする情報と河川関係者の提供できる情報の交換が、よりスムーズに図られる仕組みづくりと、人的交流の機会づくりが重要となる。また、アンケート調査やヒアリング調査等では、総合的な学習の計画段階においての、河川関係者・地域住民の情報および協力の必要性が明らかになったことや、河川関係者側の河川整備計画段階における、教育関係者および地域住民の参加要請等の必要性により、これからの河川関係者等は、学校教育と社会や地域をつなぐパイプ役として位置づけられることになる。本研究における一連の学習交流ワークショップの企画にあたり組織された「環境と川と教育を考える研究会」では、今後も教育関係者・河川関係者が連携した活動を継続発展して実施していく予定としている。